

アリス・ミラーの仕事

フロイトとヒトラー

荒木 ひさ子

〔抄録〕

幼児期に親から虐待を受けた子どもは、その時の悲しみや怒りなどの感情を抑圧する。このことが後の神経症やその他の問題の原因となり、個人と社会に深刻な影響をもたらす。ヒトラーは子ども時代に父親から深く傷つけられ、抑圧してきた憎悪をユダヤ人に向け、ユダヤ人ホロコーストという惨禍を社会にもたらした。フロイトはヒステリーの病因が幼児期の親による性的虐待にあるという確信を得、それを理論化した。彼自身の生まれ育った家族の神経症を追求していく中で、その理論の核心部分を修正した。これはその後の精神分析の展開方向に深い刻印を残した。

キーワード：心的外傷、感情の抑圧、闇教育、誘惑論

I. はじめに

本小文は、アリス・ミラーの発言についての筆者の一所見であり、ミラーの思想についての解説や業績の評価ではない。

ミラーの主張には一貫して次の2点があげられるだろう。子どもたちは教育あるいは躾という名のもとに心的外傷を受けている。この外傷体験にともなう怒り、絶望、悲しみなどの感情は、親が子を愛しているからそうするのだ、親は絶対正しいのだ、親に逆らってはいけないという教育的、社会的規範によって、否認され無意識下に抑圧される。ミラー(1980)はこれを闇教育と呼んだ。そしてこのことが後年の、暴力的人格の形成、神経症の病因となり、個人的にも社会的にも損傷の源泉となるのである。

このような抑圧をともなった複雑な人格が親になったとき、今度はかつての自分を迫害した親に同一化し、抑圧によって憎悪、憤怒、敵意に変質した感情のはけ口を、社会から非難を受けることのない、もっとも安全な自分の子どもに向ける。誰からも非難を受けない教育という名のもとに。

このようにして、心的外傷は世代間で受け継がれてゆくがゆえに、この悪循環による連鎖は困難な仕事ではあるが、断ち切らねばならない。

子ども時代の外傷が原因となっている神経症や人格障害の治療は、外傷を受けた時代まで記憶を回帰し、その時の感情、つまり悲しみ、絶望、怒りなどをありのまま再体験し、それを表現することが何より重要である。これは加害者である親への憤怒、憎悪の表出、自分の子ども時代への悲哀に満ちた再評価、理想化された親から弱い欠点だらけの親への認識の変化などの辛い作業がともなうが、彼女は、それ以外に方法はないという。この確信はミラーの20年にわたる分析家としての経験と、彼女自身の神経症の治療という体験から、ゆるぎないものようだ（Stettbacher, 1990）。

それでは治療者と患者の間の転移、逆転移を経て、患者の記憶が外傷まで行き着き、その加害者が親であると認めるにいたったとき、治療者が「それはあなた自身の性の願望から生じたファンタジーです」、「それはあなた自身の死の本能の投射による幻想です」と言ってしまうのだろうか。あるいは闇教育の洗礼を受けた治療者が「親だから許してあげなさい」と言えばどうということが患者の内部で起こるか。

患者はますます混乱し、訳がわからなくなり、より強い抑圧にさらされる。やっとめぐってきた真実を生きるチャンスをつぶすことになるのである。それは長い間無意識に閉じこめてきた内なる子どもが真実の声を上げる最後のチャンスを閉ざすことに他ならない。ミラー（1980）はこれを魂の殺人、内なる子どもの殺人と呼んでいる。

すなわちミラー（1980, 1981）は、1897年のいわゆるフロイトの転回後の、つまりフロイトがエディプス・コンプレックス論を発表し、それを基本概念としてその上に構築し、その後それが教条化されつつ発展してきた現在の精神分析に鋭い批判を投げかけている。

ミラーは、「子ども時代の人格形成には、ありのままの感情の表現が大切であり、抑圧は害があるだけである。人間が自分の生を組み立てていくためには、情動とのつながりが不可欠である。現在の精神分析はあまりにも知的な面に偏りすぎている」と言っている。

上記のミラーの主張は、読者であり臨床家でもある筆者に、吟味、検討するべき課題を突きつけたように思えた。

筆者がミラーの著書に関心を持ったのには、特別の理由はない。いささかマスコミに取り上げられた心理に関する本、という極めてありふれた動機であった。しかし、いくつかの著作を読み終えて、膝を打つようなある点に思い当たった。それはフロイトとヒトラーという歴史上の2人の人物が、もちろんひとは精神分析を創始したユダヤ人の天才であり、ひとはユダヤ人を大虐殺した怪物であるが、この同時代に生きた2人がミラーの言う闇教育と言う教育風土のなかで育ち、ふたりとも子ども時代に精神的な外傷を受けていたという1本の糸で結ばれているのではないか、という思いである。ミラーの著作の意図がこのような点にないのは言うまでもないが、彼女のいくつかの著書から上記の視点でもって考察してみる。

Ⅱ．闇教育とヒトラー

心的外傷は人が圧倒的な外力にさらされ、無力化、孤立無援化されたときに受ける。外力が自然の力の場合には天災であるが、人災の場合には、迫害者 被迫害者（第三者）という図式ができる。これは残虐行為であり犯罪である。従って心的外傷は個人の心理に関する問題だけでなく、本質的に社会性をはらんでいる。ミラーの発言が大きな社会的反響を呼んだのは当然といえよう。

迫害者は、レイプや家庭内暴力の場合のように個人であったり、戦場、ホロコースト、政治犯の拷問の場合のように、社会あるいは集団であったりする。

ミラー（1980）は迫害者として、教育の名のもとに子どもを精神的、肉体的に迫害する親、被迫害者として子どもたち、第三者として治療者の精神分析を取り上げている。

また、第二次世界大戦中のナチスによるユダヤ人大虐殺（400万～600万人といわれている）を子ども時代に受けた心的外傷で説明している。

ヒトラーはなぜあの途方もない犯罪を思いつき実行したのか、そして高い教育を受けた高官たち、学者たち、何百万のドイツ国民が積極的にそれに協力したのはなぜか、という未だ解けていない疑問にミラーは答えているのである。

ヒトラーは子ども時代、父によって深く傷つけられていた。そして彼が権力を握った時、抑圧していた憎悪を向ける格好の対象を見つけた。2000年の間ヨーロッパ社会が迫害し続けてきたユダヤ人という社会的迫害の許される唯一の対象物を。彼はユダヤ人を迫害することにより、無意識に迫害者であった父と自己同一化し、同時にその迫害に手も足も出なかったかつての弱く惨めな自己を投影し、その抹消をはかったのである。多くのドイツ国民も同様の心的状態にあった。すなわち権力者（＝父）から、彼らが抑圧している憎悪や憤怒の標的が与えられ、かつそれに崇高なるアーリア人のためにこの世界から邪悪を取り除くのだという大義名分が付与されたとき、彼らは積極的にというより喜んでその迫害に参加したのである。このように考えはじめて、あのユダヤ人絶滅というあくことなき憎しみの説明が可能であるとミラーは言っている。

Ⅱ 1．闇教育

ミラーの思想を理解するときのキーワードのひとつに「闇教育」がある。これはドイツの教育史家カタリーナ・ルーチュキイが1977年に収集した教育に関する論文集の中心概念をさす言葉である。この本には、早期の条件付けによって、人が自分に何が起こったかを気付かなくするあらゆる技術が網羅されていると彼女は述べている。その内容の一部を拾ってみると以下のような（Miller, 1980）。

アリス・ミラーの仕事（荒木ひさ子）

赤ん坊が理由もなく泣いたり喚いたりしたら、これは我儘の最初の現われだから、身振りで脅かしたり、厳しく言い聞かせたり、ベッドを叩いたり、...それでも効き目がないときは身体に感じる形で警告を発し続けなさい。

これは高名な教育学者シュレーバー博士が1858年に書いたものだが、後年彼の2人の息子はパラノイア患者としてフロイトの治療を受けている。

我儘はごく早期に現われる恐ろしい悪徳の始まりだから一掃しなければならない。一掃するには一種機械的なやり方以外にない。鞭でもって追い出せばよい。教育の目的は、従順、温順、善良な子どもをつくることであり、秩序を重んじ、正義を行なう有徳の人を作り上げることにある。

3歳になるかならずのうちにこなわなければならないもうひとつの大切な教育は、両親および上長に対する絶対の服従と不満をもたない習性を作り上げることである。これらのことはいかに厳しくとも2歳までにやれば子どもは決して覚えていないもので、後に悪影響を残さない。

子どもが強情を張っているのであれば、その時は殴れ、悲鳴をあげるまで。なぜなら不服従はあなたの人格に対する宣誓布告であり、あなたの息子があなたから支配権を奪おうとしているのだから。折檻は手加減せずあなたこそ主人なのだと思います。折檻後子どもが泣き止まなかったら、泣き止むまで折檻を続けなさい。しかし子どもによっては殴るよりも効果のある罰がある。例えば靴を履かせないとか、空腹のままテーブルにつかせて食物を与えないとか。

この時子どもは生き延びるために「素直」になるかもしれないが、感情を体験する能力を失っていく。

子どもが悪さをしたとき、だれだれさんがみていたんだよといって白状させるのは簡単すぎて効果が薄い。そうではなく、子どもをだまし、脅し、誘導尋問して窮地に追いつめ白状させたほうが効果がある。

これは子どもの自慰を禁止するのによく使われたようだ。このようにされた子どもの屈辱感と自責感には心に傷を残さないはずがない。

子どもの長所を誉め、子どもを自惚れさせず教師がいるがそれはよくない。自惚れた子どもは自己中心的となり、いずれ道德生活をこの上なく脅かすものとなる。そのような子には屈辱感を味あわせる以外に手はない。自惚れた子どもには、その子にはとても手に負えない課題を与えよ。あるいはその子とは比べものにならない才能をもった人物が成し遂げた業績の話をしてやるのもよい。

真の愛は神の心からくるのであり、開放者キリストによって我らに伝えられるものである。この上からくる愛によって自然のままの両親の愛は潔められ、強められる。この潔められた愛は子どもの霊的生活を心がけ、子どもが肉の力から開放されるように気遣う。したが

って愛は自らを否定し、克服し、押さえ、より高い意思と霊の促しに従うように心を砕く。であるからこの潔められた愛は優しくあると同時に厳しくあることもできる。

厳しい痙攣を起こす子どもも当然のことに邪悪になる。このような子どもはできる限り、外部からの働きかけを遮断してそれが気持ちよいものであれ痛みをとまなうものであれ、一切感情を高ぶらせる可能性のあるものとは接触させぬよう心がけなければならない。

これは原因と結果が取り違えられている。この手のことは教育だけでなく精神医学、犯罪学などで見られる。つまり生命力を抑圧することで邪悪を作り出し、これを追い出すと称してあらゆる手段が正当化される。

学校教育は知識よりもしつけを重んじなければならない。教育の中でもっとも肝要な原則は、まず子どもをしつけなければ知識を与えることが出来ないということである。しつけとは、まず言葉でなく行為であり、言葉となったときは命令である。しつけとは本来旧約聖書に言われるとおり罰(神の鞭)という意味である。だから教育という仕事には身体の折檻という健やかなしつけが不可欠である。そして肉こそまず第一に倒さなければならぬ力なのだから、人間の権威だけでは不足であり、神の権威と力が登場し、一人一人の子どもをその悪を生み出す耐えがたい軛の元に据えるのである。

ミラーはこれは生命力の制限であり、真の優しい生き生きとした感情は育たないという。

このような教育イデオロギーが18世紀から20世紀の200年間ドイツ、オーストリア、スイス地方の教育の原則であり、19世紀末フロイト、ヒットラーの時代にその勢力の頂点にあった。この地方は16世紀のルター、カルビンによる宗教改革の地であり、カソリック、プロテスタント、ユダヤ教の混合地帯である。

一体この酷薄ともいえる教育原則は何に由来するのだろうか。ミラーも暗に示唆しているが、旧約聖書のモーゼの十戒ではないだろうか。出エジプト記の中で主(神)がシナイ山頂でモーゼに告げ、モーゼが山を下って民に伝えた十戒である。その中から関連する部分を拾ってみる(日本聖書教会、1967)。

わたしの他に何も神としてはならない

わたしを憎むものには、父の罪は子に報いて3、4代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには恵みを施して千代に至るだろう。

わたしの名をみだりに唱えるものは罰しないではおかないだろう。

あなたの父母を敬え。これはあなたが長く生きるためである。

ミラーも嘆いているように、なんと気難しく、なんと不寛容な神であることか。仏教の中心思想である縁起とはきわめて対照的だ。闇教育の執行者である家父長像はこの神をモデルにしたものだろう。

Ⅱ 2. ヒットラーの子ども時代と心的外傷

ミラーは子ども時代の心的外傷がいかにか成人後の神経症的悲慘の原因となり、個人的、社会的損傷をもたらすかの実例を、虐殺者（ヒットラー、チャウセスク）、連続児童殺人犯（バルチェ）、麻薬中毒者（クリスティアーネ）の子ども時代の生活史をたどることにより実証している。そしてミラーはこの分析作業において常に、「この『子どもたち』の辿らざるを得なかった運命に共感をもって近づき、教育された大人の目できめつけたりはしない」という姿勢を保っている。

アドルフ・ヒットラーの父アロイス・ヒットラーは、1837年オーストリアの一農村ドレスハイムで、未婚の娘アンナ・シックルグラーバーより生まれている。父親ははっきりしないが可能性のある男性は3人いる。ひとりアンナがアロイスの出産後5年経って結婚した家なしの粉挽き職人ヨーハン・ゲオルグ・ヒートラーである。ふたり目はこのゲオルグの弟の農夫ヨーハン・ネポムク・ヒュットラーである。アンナは結婚と同時に息子のアロイスをこの夫の弟に譲り渡している。このふたりの男は同程度にアロイスの父親である可能性があり、ふたりとも非常に貧しかった。第3の候補者は、フランケンベルガーなるユダヤ人である。アンナはアロイスを妊娠したとき、このフランケンベルガー家に料理人として勤めていた。そして息子のアロイスが14歳になるまで、フランケンベルガー家から扶助料をもらっている。後世の調査によれば、このユダヤ人がアロイスの父親、つまりアドルフの祖父である可能性は前の2人の兄弟より低いらしいが、何故にこのユダヤ人が14年間扶助料を支払っていたかは謎である。しかし、重要なことは、後世から見た“詳細な客観的事実”よりも、アドルフの父アロイスが子ども時代にどのような外的、内的環境のもとに育ったかということである。

貧困、私生児、5歳で生母との別れ、ユダヤの血の疑い。アロイスは2度結婚しているが（2度目の結婚の第1子がアドルフである）、2度とも結婚前に妊娠させ、自分の蒙った婚前出産という運命に無意識裡に復讐している。ユダヤの血の疑いと葛藤は生涯解けることがなかった。

アドルフの父アロイスはタフで目的意識のはっきりした人物であった。13歳でウィーンの靴屋に徒弟に入ったが、職人にならないと決めるやいなやオーストリア税務局に勤めるようになった。彼はここでめきめきと頭角を現し、最終的には彼の学歴としては上り得る最高位の、上級税関事務官になった。彼は好んで公式の会合に姿を現し、正式の官名で呼ばれるのを喜んだ。性格は厳格、厳密、衛学的であった。残っている何枚かの写真はいずれも制服のボタンを光らせ、堂々として気むづかしそうな役人面の下に、タフさ、演技欲、尊大さを感じさせるものであるらしい。

アドルフは1889年母クララより生まれる。父アロイス52歳のときである。彼には異母兄弟がある。クララはアロイスの姪で、彼らが結婚したのはクララ24歳、アロイス48歳のときである。アドルフの前に3人の子どもを産んだが、アドルフが生まれる約1年前に、4、5週間

の間にジフテリアで3人とも亡くしている。夫は支配的で怒りっぽく、彼女がその悲しみを生きる手伝いをする人はひとりもいなかった。アドルフ出産直後の母子一体の時期に、アドルフもその母から安らぎ、満足、安心感といった感情を母乳とともに吸い取ったとは考えにくい。その後弟と妹が生まれる。

アドルフが父の鞭と侮蔑に日々驚かされ、一種の地獄の中で生き、終わりなき恐怖と精神的外傷に囲まれて暮らしていたのは間違いない。それに関する多くの記録と証言が残っている。4歳以下の頃から父に殴られていたらしく、妹パウラの証言では、兄アドルフは「毎日相当ぶたれていた」ということである。

たとえば、11歳になったアドルフは絶望のあまり、3人の友人と一緒に家を逃げ出し、自分で作った筏で川を下り、父の暴力から自分を救い出そうと考えていたが、その考えを父に知られただけで、ほとんど死にかけるまで鞭で打たれている。

また後年、アドルフは自ら女性秘書に次のように語っている。「それでわたしはこの次打れるときは絶対声を出さないぞと決心したのだ。まだはっきり覚えているがね。わたしは一打ちごとに父と一緒に数えたものだ。そして『お父さんは32回もお打ちになった』と母に報せにいったものだ」。

アドルフはその権力の絶頂期にあっても父の折檻という精神的な外傷から逃れることはできなかったらしい。夜、無意識が幼い頃の体験を告げる眠りの中で、彼の前に恐ろしい父親が現れ、恐怖に苛まれた。以下はある側近の証言である。「彼は、追跡妄想および二重人格に近い症状を示すこともあった。彼はよく夜中に目覚め、落ちつきなく歩き回る。そういうときは明るくして若い者呼び寄せ、隠しようもない恐怖のいく時間かを彼とともに過ごすようにさせている。...その晩彼はひきつけるような叫び声を上げて起き上がった。彼はベッドから降りることもできなかった。恐怖で全身を震わせ、ベッドまで揺れていた。はあはあ喘いでいた。彼はよるよるとベッドから立ち上がると、「あいつ！あいつ！あいつがそこにいるんだ」唇は真っ青で汗が体中から滴り落ちていた。突然彼は数を数えはじめた。...彼は静かになり立ち尽くしていた。そのままの姿勢で乾布摩擦をしてやり少量の酒を唇から流し込んだ。すると彼は大声でまた叫んだ。「ここだ！その隅だ！だれだ、そこにいるのは」彼は足を踏みならし叫んでいた。誰も居ないことを見せてやると徐々に落ち着きを取り戻し、その後長時間眠り続けた」。

アドルフが父に対してどのような思いを抱き、幼いアドルフには父の姿はどのように映っていたのだろうか。

アドルフが父に積もり積もった憎悪を抱いていたのは確かだ、彼は次のようにして父に復讐している。1938年5月オーストリア併合の数週間後、父アロイスの生地ドレスハイム村とその周辺の村落をすべて練兵場に変え、父親の生家も祖母の墓場も跡形なく破壊してしまったのだ。

ミラー(1980)はアドルフは生涯、幼きアドルフの心に深く刻み込まれた父の姿を演じ続け

たのだといっている。ひとつはチャップリンが映画「独裁者」演じてみせた、ぎくしゃくした、画一的な、少々滑稽な独裁者。ひとつは偉大な、敬愛され、嘆賞されるドイツ国民の総統、そして迫害者として周囲のものを震え上がらせる独裁者を。

Ⅲ．フロイトの転回と心的外傷

フロイトによって創造された精神分析理論は次の2点で際立っている。ひとつは、その発展がフロイトの個人的体験と緊密な関連があること、もうひとつは、このことと密接に関連しているのだが、1897年にそれまでの理論の核心部分について、彼が劇的な形で取り消しを行ったことである。

フロイトがこの理論上の修正を書き記した叙述を引用する（Freud, 1898）。「私の患者の大部分は、成人による性的誘惑を内容とした、幼児期に由来する光景を再現したのだった。女性の場合には誘惑者の役割はほとんどいつも父親に帰せられた。私はこれらの報告を信用した。そして、幼児期における性的誘惑の体験こそ、後の神経症の源泉が見いだされるのだと仮定した...しかし後になってこのような誘惑光景などは、決してあったものではなく、私の患者たちが創作した、あるいはもしかすると私が彼らに無理強いして創作させたのかもしれないところの空想にすぎないということを認識せざるを得なかったときには、私はしばらくの間どうしてよいか分からなくなってしまった...私は気を取り直すと、神経症の症状は実際の体験と直接結びついているのではなく、願望に由来する空想に結びついているものであること、また神経症にとっては、物質的実在よりも心的な実在の方がより大きな意味をもつのだという正しい結論を私の経験から引き出したのである。私はこの時初めて、エディプス・コンプレックスに突き当たっていたのである。」

フロイトはこの修正によって彼が抱えていた個人的な問題を解決したのだった。

フロイトは1881年に神経生理学で学位をとり、神経生理学者として生涯を送るつもりであったが、師のエルンスト・ブリュッケの勧めにより、それは思い止まりマルタ・ベルナイスと結婚するためにも、できるだけ早く開業しようと努力していた。1885年大学での教授資格を獲得し、奨学資金の獲得にも成功した。これはパリのジャン・マルティン・シャルコーのもとで神経病理学を研究するためのものであった。彼はシャルコーのもとで脳解剖学的研究に取り組んでいたが、間もなくこれを断念した。それは他の研究テーマすなわちサンペトリエール病院におけるシャルコーのヒステリーの治療の方がはるかに彼を魅了したからである。この時期をフロイトの心理学への転回点と位置付けてもよいのではないか。フロイトはシャルコーの賛美者となってサンペトリエール病院を後にした。ヒステリー症状は催眠術によって影響されるものだというシャルコーの認識と、この症状は早期の諸経験に還元されることができ、それとともに消滅させることが可能だという友人ブロイアのアンナ・O体験、このふたつによって、

フロイトは新しいヒステリー理論の断固たる支持者になった。彼はその後催眠術を熱烈に擁護した論文をいくつか発表し、ウィーンの医学界では次第にアウトサイダーになっていった。

1886年パリから戻ると彼はマルタ・ベルナイスと結婚し、続く数年間に6人の子どもをもうけた。こうした事情で彼はまず医者としての仕事に精を出さなければならなかった。

1889年フロイトは初めて自分の患者にブロイアーから受け継いだカタルシス療法を自分自身で用いた。このときの治療やこれに続く治療で、フロイトは症状の背後に見え隠れする性的テーマに何度となく遭遇した。そして「神経症を後天的に起こす原因について云々し得る限り、その病因は性的契機のうちに求めるべきだ」という認識に至った。そして、その後約10年間ほぼ完全な孤立状態で自己の理論的諸概念を発展させた。

フロイトは神経衰弱と不安神経症を一括して現実神経症と呼び、1892年～1893年にはすでにこの現実神経症の性的病因説はすでに固まっていた。それは要約すれば、その原因は自慰や避妊目的など禁欲を含む現在の不完全な性的行為にあり、心的原因はないとした。そしてこの神経症は精神分析によっては治療不能とした。彼は当時現実神経症の諸症状に悩まされていたのである。

一方フロイトは1896年ウィーンの精神医学界で「ヒステリーの病因論について」という講義を行っている。その中で「18の全例において幼児期における性的体験がある。これは3つのグループに分けられる。ひとつは大人が暴行する場合。第2のグループは世話する人が子どもに性的交渉の手ほどきをするもの。第3は子ども同士だけの関係。しかし、この場合も男子が以前ある大人の女性に誘惑されているのである」(Freud, 1898)。

しかし神経症が必ずしも生み出されるのではない。「そうなるためには、回想されてはならないという要因、体験が抑圧の支配下になければならないという要因が付け加えられなければならない。幼児早期の誘惑を意識的次元で自由に回想できる人間はヒステリーにならない。それではこの体験が意識的回想を生むか無意識的回想を生むかの違いは何によるのか」(Freud, 1898)。フロイトは彼自身この問いに答えていない。つまり、優越した力を持つ大人と、それに従属する子どもとの関係であり、子どもはその体験を話すことのできる相手はひとりも居ないし、大人は沈黙を要求し、子どもを意のままに操る。だからこそ抑圧が、したがって生じたことを意識化しないということが起こるのである。とここまで思考過程を先に進めることは容易にできることだが、フロイトはそこまで至っていない。その理由は2,3ヵ月後にこの誘惑理論を放棄せざるをえなくさせた個人的問題を抱え込んでいたのだ。

フロイトは彼の患者たちについてますます明白な確証をつかんでいった。そして父親の倒錯が子どもを誘惑する真の原因と考えられるようになった。その時彼はまだ自分の神経症は現実神経症でヒステリーとは考えていなかったらしい。この時期父ヤコブの死という重大な事件があった。彼は父ヤコブに対して強いアンビヴァレントな感情を抱いていた。父親の死を景気に、彼は自分の生まれ育った家族を対象にして自分の兄弟姉妹たちの神経症的な症状が父親による誘

惑によってどの程度引き起こされたものかの調査に着手した。そして彼の弟や何人かの妹たちにヒステリー症状が見られることから彼自身の父さえ〔誘惑者〕であったに違いないと結論した。そして自分自身も〔誘惑されていた〕のを認めざるを得なくなった。

ユダヤ教の最も厳しいタブーに近親相姦がある。フロイトはこの事実に突き当たって2週間程度思考停止の麻痺状態が続いたらしい。彼は誘惑理論を放棄した。そしてエディプス論を発明した。フロイトにとっては、全ての人がかつて母に愛着を抱いたのであり、父を殺害したいと望んだのであった。父と母はそうした願望の受動的な印象へと変換されており、もはや誘惑者ではない。だからこそ彼自身父への死の願望を公然と認めることが出来るのである。全ての人間の所与のものとして。もし誘惑理論に従っていたとすればそのような願望を彼のうちに抱かせるものは何かが問われるのだから。

誘惑理論から、欲動概念に基礎をおくエディプス理論への転回は、父の過去を護らねばならないという命題と、他方神経症という人間の人生の大いなる謎を解き明かさなければならないという相矛盾する命題を一気に解決した。しかしこの転回の影響はそれだけにとどまるものではなかった。エディプス・コンプレックスという子どもの内部から生み出される願望が、ある時は神経症を生み、ある時はそうでないのはなぜか、この問いは必然的に遺伝的な素質に帰着した。誘惑理論では遺伝の影響はないものとされていたが、今や遺伝があらゆる神経症のひとつの大きな病因論的意義を持つようになった。

このように1897年のフロイトの転回は、その後1世紀間の精神分析および分析的治療の転回の方角を決定した。

IV. お わ り に

闇教育に代表される教育イデオロギーは、フロイト、ヒットラーの時代とともに終わりを告げたのだろうか。第二次大戦とともに消滅したのだろうか。現代の日本の教育とはもはや無縁のものなのだろうか。1980年代のアメリカの調査によると、アメリカ社会では、4人に1人がレイプされ、3人に1人の女性が小児期に性的虐待を受けている。ハーマン（1992）はこの恐るべき事実をアメリカ社会の風土病だと述べている。男児への虐待、教育、しつけの名を借りた数字には現れない肉体的、精神的虐待を加えれば、上の数字は氷山の一角にすぎないだろう。しかしアメリカ社会は最も民主主義が定着した社会であり、最も開かれた自由な社会であるといわれている。そして、その学校教育、つまり公の場での教育は非常に自由で、開放的で、個性を重んじる教育であるといわれている。そのような社会においても家庭という隠蔽された場所では、想像を絶するような数の子どもたちが虐待を受けていることになる。したがって、これはアメリカ社会固有の現象と考えるよりも、少なくとも聖書を倫理の規範とするユダヤキリスト教文化圏の遺伝病と考えたほうが合理的であろう。

さて、日本社会における教育原理と児童虐待の実情はどのようなものだろうか。第二次世界大戦までは忠・孝・恥が教育、倫理の中核であった。戦後、一部の人を除き、忠は抜け落ちたものの、孝と恥の思想は脈々と日本社会の中で生きている。親が子どもを教育の名のもとに虐待するとき、この思想は威力を発揮する。この思想が虐待する親から虐待しているという意識を取り除き、傷つき辱められた子どもは残酷な親を否認し、逆に理想化し、自分の受けた痛みを決して(世間に)表さず、自己の内部に抑圧する。これが教育(躰)のもとでの児童虐待の構図であろう。

日本における2001年度の児童虐待の調査(厚生労働省)によると、全国の児童相談所で受理されたケースは年間で約23,274ケースである。身体的虐待10,828、ネグレクト8,804、心理的虐待2,864、性的虐待778、で被虐待児の半数が小学生以下の年齢である。しかしこの数字はいわば“立件”されたケースであり、これも氷山の一角にすぎない。むろんミラーが問題にしている教育による虐待(隠された虐待)を表していない。

1970年代のアメリカのフェミニズムが、それまで社会の禁忌であったレイプの実態を白日のもとに引き出した。この運動は自然の帰結として、家庭内暴力、児童虐待に行き着き、社会・政治問題として世に問うた。しかし人権意識がまだ低く、子どもは我が持ち物という封建思想の残滓が色濃く残る日本社会では、この問題に対する社会的、政治的関心はまだまだ低い。

ミラーは主張している。子ども時代に受けた精神的外傷はその個人にも社会にも深刻な影響を及ぼすと。そして人生初期の条件付けによって架せられた軛からは人間はまぬがれることはできない。たとえそれがフロイトのような巨大な知性であっても、と。

〔参考文献〕

- Herman, J. L. (1992): Trauma and Recovery. First published by Basic Books, a Division of Harper Collins Publishers, Inc., New York. 中居久夫訳(1996): 心的外傷と回復 みすず書房
- 懸田克躬他訳(1971): フロイト著作集1. 人文書院
- 懸田克躬他訳(1974): フロイト著作集7. 人文書院
- Krull, M. (1979): Freud und Sein Vater. C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung Munchen. 水野節夫他訳(1987): フロイトとその父 思索社
- Miller, A. (1980): Am Anfang nicht merken. Suhrkamp Verlag Frankfurt. 山下公子訳(1983): 魂の殺人 新曜社
- Miller, A. (1981): Du sollst nicht merken. Sunhrkamp Verlag Frankfurt. 山下公子訳(1983): 禁じられた知 新曜社
- Miller, A. (1990): Abbruch der Schweigemauer. Hoffmann und Campe Verlag, Hamburg. 山下公子訳(1994): 沈黙の壁を打ち砕く 新曜社
- Miller, A. (1994): Das Drama des begabten Kindes und die Suche nach dem wahren Selbst. Suhrkamp Verlag Frankfurt. 山下公子訳(1996): 才能ある子のドラマ 新曜社
- 佐々木承玄(2002): こころの秘密 新曜社
- Stettbacher, J. K. (1990): Wenn Leiden einen Sinn haben soll. Hoffmann und Campe Verlag, Hamburg.

アリス・ミラーの仕事（荒木ひさ子）

山下公子訳（1993）：こころの傷は必ず癒える 新曜社
高橋義孝他訳（1983）：フロイト著作集 10 . 人文書院
氏原寛他編（1992）：心理臨床大事典 培風館

〔引用文献〕

Freud, S. (1898): Die Sexualität in der Ätiologie der Neurosen. 馬場謙一訳（1983）フロイト著作集 10 .
人文書院
Miller, A. (1980): Am Anfang war Erziehung. Suhrkamp Verlag Frankfurt. 山下公子訳（1983）：魂の殺人 新曜社
日本聖書協会（1967）：聖書 三省堂

（あらき ひさこ 臨床心理学科）

2003年10月15日受理